高津おはなしアーカイブ

森　正（もり　ただし）さん
昭和７年生まれ　８４歳
川崎市高津区子母口在住

◆私には田舎がない

高津区子母口に妹と私の２人兄弟に生まれました。家は農家です。父もここの生まれで、確か１１代目。母は日吉本町からお嫁にきたので、私には田舎がないんです。祖父母と父母、妹の６人で暮らしていました。妹はだいぶ前に亡くなって私一人になってしまいました。

私は子どもの頃は身体が弱かったので、竹馬に乗れなかったんです。代わりに妹が乗ってました。私は独楽まわしや、当時はトンボやセミもたくさんいて、捕まえて遊んでいました。そう、このあたりは一面田んぼだったから、冬は凧揚げもしたなあ。

◆農繁期は、お寺が託児所に

このあたりは、面積は広いけど、家は４０～５０軒くらいだけでした。小学校にあがる前の農繁期には、村の青年団の女性が子どもたちを千年の能満寺に連れて行ってくれ、一日一緒に過ごしました。お寺が託児所だったんです。農閑期は家にいて近所で遊んでましたけどね。

◆年上の子が年下の子を守る

小学校は橘小学校へ砂利道を通いました。道幅は今の半分くらいで近所の子どもが６，７人集まって一緒に学校に行きました。うちは近い方だったけど、蟹ヶ谷の専念寺さんの方からくる子もいましたよ。

年が上の子が下の子の面倒をみる、中原の方に行って他の地域の子と一緒になった時に縄張りではないけど「橘の子は橘の子が助ける。大きい子が小さい子を守る」ことは当たり前でした。

運動会は騎馬戦があったね。家にあるものでお弁当を持っていきました。ごはんに、おかかや海苔、卵とか、そんなものが入っていたことを覚えています。

中学校は、中原まで歩いて、そこから南武線、小杉で東横線に乗り換えて自由が丘学園まで通いました。当時の中学校は、旧制中学で５年生までで今の高校のような役割でした。途中で３年制の新制中学に変わったけれど、私は長男で、家の農業を手伝うために旧制中学を５年で卒業し、新制中学には行きませんでした。

◆田んぼが火の海に

昭和２０年４月１５日だったかなあ、このあたりは空襲を受け、一面に広がっていた田んぼに焼夷弾が落ちました。想像できないですよね。

山の方にみんなで逃げて家族は無事でした。私の学用品などは従妹が持ってくれた記憶がありますね。家は全焼し、近くの圓融寺、遭乗院も焼けました。家にあった仏具や、農具、記録などもこの時に全部焼けて失くなってしまいました。だから父が何代目かも正確に分からないんです。防空壕もすっ飛びましたからね。梶ヶ谷の方は爆弾が落ち、父が片付けの手伝いに行ってました。

空襲はその後も続いて、今度は機関銃を積んだ戦闘機が飛んできて、バッバッバッと機銃掃射。あれは怖かったねえ。大きな爆撃機は爆弾落とすだけだけど、戦闘機は機関砲を打つから怖かったです。でも「やられた」という人はいなかったんです。Ｂ１７（爆撃機）も低空を飛んできたのを見ました。

◆戦後しばらくはバラックに住む

家が焼けてしまったので、今の交番前にあるハナシロという電気屋さんのあたりに焼け残った家作(貸家)があってそこを借りて住み始めました。そのうちバラックの小屋を焼け跡に建てて、結構早く家は再建しました。蟹ヶ谷や久末の畑は軍用用地として無線塔を建てるために買い上げがあって、その時に得たお金が少しあったのかもしれません。食糧難の中、生産したものが高く売れたことも再建を早めたんだろうね。

◆仕事は私の道楽

田んぼは家の近くに、畑は蟹ヶ谷にありました。今、田んぼは無くなりましたが、蟹ヶ谷の畑は今も耕していますよ。山の上、今ある明石穂団地の近くの畑には坂道をリヤカーを引いて行きました。

戦争前は、小松菜やネギなど葉物類をひととおり作っていて、戦争中は供出もあって、サツマイモやムギ、オカボ（陸稲）が中心になりました。

私は負けず嫌いで、中学生のころから「親父に負けてなるものか」と、鍬でサクを切れるように意地になってやっていました。

昭和２５年頃から役牛の牛を１頭飼っていて、田んぼのすき起こしから私が全部やりました。牛が思うように動いてくれるまでが大変でね、でも牛はかわいかったよ。牛がいない家に牛を貸してあげたりもしてました。豚も飼ってました。産まれたばかりの豚もかわいかったなあ。当時、千年、子母口では養豚をやっている農家も何軒かありました。

野菜などの出荷は武蔵小杉の精養軒の近くに市場があって行きました。私が小さい時は太陽幼稚園の入り口あたりにも市場があったけどね。

お正月も、鍬や鎌など道具の手入れや、牛が田んぼで滑らないように履かせるわらじをいくつも作ったりしてあまり遊んだ記憶はないんです。

これが当たり前。私は夢中でやった結果として得られる収穫の喜びが一番で、売れる値段は二の次なんです。仕事が私の道楽です。

そういえば、仕事の合間に食べた山い

ちごはうまかったなあ。今のたちばな幼稚園の脇の旧道をあがったあたりにあったんです。

◆１００羽から始めた養鶏

養鶏は昭和３０年頃に１００羽から始めました。肥料が欲しかったんだと思います。土地も売らずに始めたので、すぐには増やせませんでした。でも市から機械の購入などに助成があって助かりました。

始めた頃はこのあたりから木月の法政二高の時計台や新城の駅も見えました。道はまだ砂利道で、バスが通ると埃が追いかけてくるって感じで大変でした。

鶏舎は、今は温度、空調管理などすべて自動で管理されているけど、当時は人の力だけ、大変でした。ヒヨコを手に入れて豆炭や電気で暖めて大きく育てたり、寒くなる１月から３月は老鶏になると卵を産まなくなるし…。

一番苦労したのは鶏の病気です。ニューカッスル病という病気にかかり、全羽がダメになってしまったこともありました。昔はピストル型の容器でプシュプシュと一羽ずつ自分たちで生ワクチンを打ったんですよ。でも、ワクチンの注射をしていないヒヨコがお祭りで売られていて、そこから病気が伝染したこともあって苦労しました。

昔は大変だったの。今はそういう苦労はなくなったけどね。

このところ話題の鶏インフルエンザはここでは出ていないです。今は県の畜産課が年に３回くらい採血して鶏を調べてくれています。もし１羽でも病気が出たら全部ダメになる、でも「調べてください」とお願いする、私たちはそういう覚悟で養鶏をやっています。

畜産農家は市内にたくさんありましたが今ではだいぶ減り、養鶏は６軒しかありません。

この道５０年、よくやってきたよね。ゲージを組み立てるのもカミさんと二人で夜中までやってね。うちの養鶏は今は３，０００羽くらいになっています。

◆魚屋も肉屋もあった

千年に、末長屋さんという今でいうスーパーみたいなお店があって、お勝手で使うものは溝口に買いに行ったりしてました。久末の信号あたりに魚屋さんもありました。肉屋さんは巌川橋の近くにあって、竹の皮にお肉をのせてくれる売り方で、当時はグラムでなく、匁で買いました。

味噌も醤油も家で作って、今の高津区役所近くにある坂戸屋さんに麹を買いにいくが私の役目でした。

◆祭りにはお重詰めを運ぶ

このあたりの祭りは神輿も山車も無かったんです。昔から住んでいる人が少なかったから、神輿を担ぐにも人がいなくて作らなかったんじゃないかな。

祭りの時期になると､「今日はお祭りだから」と母が重箱に煮しめとか赤飯などご馳走を詰めてくれて、それをその地域の親戚の家に持っていって一緒に食べた思い出があります。あちこちの祭りに母が作ったご馳走の入った重箱を自転車で運ぶのが、私の仕事でした。これはすご

く楽しかったな。

◆地域の人のつながりにも変化が

近所では代が変わる時に、多くの家は相続で土地と屋敷まで手放さざるをえなくなってしまう、だから昔の家はほとんど無くなりました。怖い世の中だよね。

うちのところは子母口北町会で、私は町会長を２０年やりました。連合町会も、社協もやりました。まわりの人がいい人だったから、できたんだと思うね。

４０～５０軒だった地域が今では１，６００件ほどになっています。だから町会に行ってもどこの家の嫁か、全然わからなくてね。うちもこれからは孫が地域にもっと出ていってつながりを作っていかなくてはいけないね。

昭和２２年（左）平成１７年（右）子母口周辺

昔からいる人と新しく移り住み始める人では考え方が違うこともあります。「町会は面倒」といって役を引き受けない人も増えているし…。

◆１年で大きく違う時代

妻はひとつ年上で、実家は橘樹神社の近くです。地域で青年団の活動を一緒にしていた仲間で、お節介焼きのおじいさんが「どうかな」と取り持ってまとまった…だから恋愛結婚ですよ。青年団では社交ダンスを習ったりして、面白かったの。

私の歳は、学徒動員は免れて行っていません。妻はひとつ上なので、軍需工場に勤労奉仕に行っています。１年違うだけで、大きく人生が変わった、そういう時代でした。

（平成２８年１０月１１日取材）